ビスマルクの鞭

2024年9月1日にウィキソースから書き出されました。

ビスマルクの鞭
作者：エミール・オリヴィエ
1909年

Revue des Deux Mondes, 5e période, tome 51, 1909 (p. 241-283).
姉妹プロジェクト：データ項目

I

12日の夜から13日にかけて、ベネデッティは夜7時にグラモンの派遣を受けた。彼は、この派遣で要求された保証の要請は無駄であり、不適切であり、危険であると判断していることを伝えた。「これらの保証は不可欠であったか。また、プロイセン王が、彼の威信に損害を与えることなくこの紛争から離れ、紛争に戻ることに同意できたと推定する理由は何であったのか」。国王がフランス大使への通信で甥の決意を承認した後、甥に立候補を再開する許可を与えることができた、あるいは与えたいと思ったと、どうして認めることができようか。ベネデッティがそう考えたのだから、コメントなしに一歩を踏み出してはいけない、その不幸な結末を彼は見たのだ。大使としての義務でそうせざるを得なかったのだろうか。大使は、単に政府の言葉を伝える電話機ではない。確かにそうだが、それ以上に情報提供者であり、率先して行動しなければならない相談役でもあるのだ。1860年には、イタリアに教皇権の保障を求めないよう説得し、1866年のベルギー征服に関する条約で、ある条項を無効とさせたのである。エムズでの交渉では、規定よりも控えめな言

葉を使い、命令ではなく助言をしようとし、セラーノがレオポルド公爵に使者を派遣したことを王に知らせようとしなかったのである。12日の7時に出されたグラモンの指示は、確かに他の指示よりも厳しいものだったが、それ以上に重大なもので、観察の義務を免除するどころか、彼の考えでは、悪い影響を与えるとより取り返しのつかないことになるため、より一層その義務を課している。私はグラモン公爵と不仲であった」と、彼は書いている。しかし、この反対意見を外交エッセイで表明すべきであったのは1895年ではなく、7月13日の朝、警告と異議を唱える派遣によってであった。そうしないことで、彼はグラモンを非難する権利を否定し、自分は非難されないと考えたのだ。パリに批判を送ることなく任務を遂行しただけでなく、まるで個人的な信念を表明するかのように、それを強調した。

13日の朝、夜明けとともに、ラジヴィル副官を訪ね、謁見することを願い出た。王はすでに出かけていた。それでも、大使の意向を伝えられ、帰国後に迎えるという返事をした。そんな中、ソース近くの公園を歩いていたベネデッティは、ふと気づくと国王の前にいた（午前9時10分）。ウィリアムは弟のアルブレヒト王子と、副官を従えて歩いていると、ザール川の土手、浴場の近くでベネデッティを見かけた。大使は礼儀正しくて王に近寄らなかったが、王の方から近寄ってきた。この動きを見ていた散歩中の人たちは、この出会いの意味を探るように不思議そうに眺めていた。そして、アルブレヒト王子と副官が数歩後ろで立ち止ま

り、会話が聞こえないように群衆を封じ込めたのである。王の顔は、心に重くのしかかる不倫から抜け出そうとしている男の満足感で輝いていた。シグマリンゲンからの郵便物はまだ届いていませんが、いい知らせがあるので見てください」と言った。そして、同時にシグマリンゲンの電報が載っているケルン新聞の余分な紙を手渡した。そして、「これで、すべての悩みと悲しみが終わった」と明るく語った。彼は、熱心に、そして満足のいく感謝をすることを期待していた。グラモン公爵からの電報で、皇太子がスペイン王家に離反したことがわかりました」。ナポレオン皇帝はこの知らせを満足げに受け取り、この事実が事件を収束させることを望んでいます。しかし陛下は、今取り下げられた立候補が今後繰り返されないという確約を得たいと考えています。陛下にはグラモン公爵に、王子の再度の申請を禁じられると申し上げることをお許しください。

王の心中も察するに余りある。彼はこの誠実な努力に対する答えとして、あらゆる善意にもかかわらず、自分の信用を落とすことなく受け入れることは不可能な、無益な要求を受け取ったのである。まさに王者の風格を漂わせていた。私はまだレオポルド皇太子の決定を知らず、それを知らせるメッセージを今か今かと待っているところである。ベネデッティは、国王に仮説による推論を促し、放棄が行われたことを認めるようにと主張した。彼は、自分に権限のない区別に入ることで、君主としてではないにせよ、一家の長として同意するよう促したのである。国王は承認について説

明せず、将来の保証も断固として拒否する。「このような約束はしたくないし、できません。後にナポレオン自身が立候補を認めたら、果たしてどうなるのだろうか。では、反対すべきなのか?私には何の意図もないし、この件に関しては、永久に片付けて欲しくないという思いが強すぎるのである。しかし、私がここで話していることを、あなたの主権者である皇帝陛下に繰り返してもよいのである。私は、私のいとこであるホーエンツォレルン公とその息子を知っています。彼らは正直な人たちで、もし彼らが受けた立候補を撤回したとしても、後でそれを再現しようという下心で行動したわけではないことは確かである。ベネデッティは3回目の告発を行いました。「君主やその政府が将来を約束することを望まないのであれば、ある程度は説明しますが、国王が身を置いた場所にとどまり、私はホーエンツォレルン家の当主に話しかけているのであるから、この立場なら、陛下は私が指示されている要求を、いかなる不利益もなく確実に受け入れることができます」。我々のアプローチは下心がなく、ただ新たな不和を回避し、心配される利害関係者の信頼を完全に回復することを目的としています。この時、王は焦り、その主張が不適切であると判断した。大使、私は今お答えしたところだが、付け加えることは何もないので、辞退させてください。彼は2歩下がって敬礼し、目の前を通り過ぎる群衆を横切ってホテルに戻ったが、口にしていた以上に不機嫌で、女王に伝えた説明では、ベネデッティをほとんど不遜だと言っていた。

ベネデッティは、この返事をすぐにパリに電報で伝えた（10時半）。しばらくして、グラモンからこの夜2回目の通信を受け取ったが、それは1回目の通信を弱め、制限したものだった。そして、「今にも届くであろうホーエンツォレルン皇太子のメッセージを知るために、王が私に尋ねるのを待っているのである。」と答えた。この機会に、今朝国王に申し上げたことを主張し、皇帝の命令に改めて従います。

II

パリでは13日、ロバート・ミッチェルが『コンスティチューションネル』紙に発表した「ドイツの王子のスペイン王位への立候補は排除され、ヨーロッパの平和は乱されないだろう」という記事で幕を開けた。皇帝陛下の大臣たちは、大国を治める名誉にふさわしい、大きな声で、毅然とした態度で発言しています。彼らの声に耳を傾け、正当な要求を満たしたのである。満足しています。フランスは、自国の利益を脅かすと判断した政治的結合や家系に反対することを宣言し、立候補を取り下げたのだ。ホーエンツォレルン公はスペインに君臨することはないだろう。我々はこれ以上を求めず、誇りを持ってこの平和的解決、つまり涙や血の一滴も必要としない偉大な勝利を歓迎します。

私は、その記事が私の見解と一致し、楽観的で素晴らしいものであることを知りました。私は、朝9時にサン＝クルーに行き、評議会に出席して、この知的な作

家が勇敢に表現したことを公式に承認してもらおうと決心した。ルブッフは、他のすべての大臣と同様、保証の要請があったことを知らなかった。参議所の控えの間で、側近を伴った皇太子に会った。助役は「まだ終わってませんよ!」と超然とした態度で言った。
我々は保証を求め、保証が必要なのであるオックスは飛び上がった：「保証? どういう意味だ?何が起きたのだろうか?何か新しいことはありますか?彼は怒ったように会議場に入り、窓の前に立って会話しているのを見たグラモンと私の方に移動し、怒ったアクセントで我々にこう呼びかけました。この保証は何か?また喧嘩が始まって、どうしよう?しかし、私は準備を止めてしまったのだ! 私がどれほど恐ろしい責任を負っているか、あなたは知らないのだ。このままではいけない。今朝、平和なのか戦争なのか、絶対に分からなければならない。

ルブッフはこれまで無言で会議に出席し、戦争を促すことはなかった。一度でも、シュヴァンディエが、平和を守るために何もしないという我々の義務に立ち返ったとき、隣人のルブーフが、彼の足を叩いて言った、「主張することを恐れるな、それは皇帝の意見だ」。その日、彼は突風が吹く中、議論に入った。グラモンは、前回の会議以降に受領または送付されたさまざまな文書、特に夜の文書を読み終えるやいなや、ルブッフが熱烈な言葉で予備役の即時呼び戻しを要請した。私に失わせる日々は、この国の運命を危うくするものである。」と叫んだ。ベネデッティが警告していたように、プロイセンはすぐにでも軍隊を動員して

応戦するだろうからだ。ルクセンブルク事件当時、ニエルは破局を予測してル・ブッフをメスに派遣し、物資を補充させたが、そのために事態が急展開するところであった。予備役の招集は、戦争が確実になったことを意味する。我々は戦争を望むべきなのだろうか?我々は、その時点でプロイセン王の手中にあった保証の要請を出すことが適切かどうかを検討する必要はなく、夜の電報が送られなかったかのように、また質問に答えられなかったかのように審議することはできませんだった。誰もそれを与えることを口にせず、皇帝への敬意からか、あるいはその無用さからか、誰の逆襲も聞かれなかった。

我々は、解決すべき緊急の問題に対処しただけである。それは、もはや取り返しがつかない保証の要求によってもたらされる結果を知ることである。我々はまだアンソニー王子の放棄を記したオロサガからの電報しか持っておらず、レオポルド王子が批准し、プロイセン王が承認し、スペインが受け入れるまでは十分とは考えられないということで一致した。予想通りレオポルド皇太子が父を離縁しなかった場合、国王が約束通りそれを承認した場合、スペインが候補者の放棄を諦めた場合、国王が将来の保証を拒否しても、我々は満足と言えるだろうか?逆に、我々が主張するだろうか。この主張に最後通牒のような性格を持たせ、我々の要求を支持するために予約を取り消すだろうか?このような形でしか、平和か戦争かの問題は生じないのである。

評議会は分裂した。メージュとモーリス・リシャールは、この元帥の結論を強く支持した。アントワーヌ神父の離反は深刻なものではなく、我々がそれで満足するならば、憤慨した国は我々を軽蔑するだろう。プロイセン王の違反は、彼から賠償を受けるべきものであり、将来の保証は我々が要求できる最低限のものだ。皇帝はこの意見を支持し、手紙の様々な主張を再現し、「我々はプロイセンに対して、このホーエンツォレルンの件以外にも多くの不満がある」と辛らつに言い逃れたのだった。その時、リヨンからの手紙が届けられ、議論が中断されたので、皇帝がそれを読み上げたのである。そこにはグランビルからの電報があり、もし皇帝制政府が対立の場を広げ、放棄に満足することを宣言しないならば、多大な責任を負うことになることを表していた。そして、その迅速かつ精力的な支援に乗じて、親身に、しかし同時に非常に切実に、この解決策を納得のいくものとして受け入れるよう促してくれたのである。

議論は再び、高く、深く、熱く始まった。各議員が名指しで意見を述べた。私は、保証の要請を送る前に私に相談があれば、それに反対する理由を述べて、留保の撤回に反対した。そして、ほぼ確実なように、国王がいかなる保証も拒否するならば、我々は主張せず、この問題の解決を宣言し、留保を撤回せず、平和を確保することが我々に依存している瞬間に戦争に身を投じてはならないと主張したのである。セグリスとシュヴァンディエは、一人は美しい雄弁で、もう一人は説得力のある良識で、私を支えてくれたのである。ルー

べやプリションも、それに負けず劣らずの迫力だった。私は何度も議場に立ち、怒りに近い激しさで同じ議論を繰り返したが、議論に口を挟まず従っていた皇帝も、ついに動揺して私の論文に賛同し、グラモンの支持を引き出した。投票が行われ、8票対4票（提督と元帥、メージュとモーリス・リシャールのもの）で私の結論が採択され、ベネデッティの措置の結果を妨げずに待つこと、しかし、保証を得ることに成功せず、承認をもたらすだけなら、それで満足することが合意されたのである。そのため、保証の要請を撤回することなく、その効果を事前にキャンセルしたのである。この依頼を思いついた人たちの邪悪な意図は阻止され、私は自分の感受性に屈することなく、この平和的成功に貢献することができたと自画自賛している。しかし、マドリードとエムスからの返事を受け取る前に、自分たちの決議を説明し正当化することも、それが引き起こすであろう議論を受け入れることもできなかったので、我々は壇上から読み上げる次の宣言を作成した。「昨日スペイン大使は、ホーエンツォレルン公がスペイン王位への立候補を放棄したことを正式に我々に発表した。プロイセンとの交渉は、他の目的を持たず、まだ終わっていません。したがって、我々がそれらについて話すことは不可能であり、今日、下院と国に対して、この問題に関する一般的な声明を提出します。

この宣言は、前日、皇帝が正当に拒否した通信を正式なものとして認めたものである。それは、この危機の中で我々が許した唯一の真実であり、アンソニー王子

の議論された行為に一貫性を与えることによって、平和の可能性を高めたいという願望から発したものである。プロイセンとの交渉はホーエンツォレルン家の立候補以外に目的がないことを指摘することで、右派の要求を退け、対立の場を広げるというグランビルの懸念を払拭した。また、我々の要求を定式化せずに話すことで、最後通告の性質を持たせていないことを示した。保証の要請を黙殺したことが、保証の放棄への道を開いたのである。もしこの審議中に、ベネデッティから保証要請による異論をまとめ、命令を再提示する前に反省するようにとの電報を受け取っていたら、公会議は共犯の影響を緩和するどころか、その実行を阻止していたことだろう。こうしてベネデッティは、義務的な率直さ以外の努力をすることなく、政府と国に大きな奉仕をすることになったのである。我々はこのことを、あの決定的な日々に開かれた最初の大きな会議の真実の記録から知ることができますし、すぐにもっとよく知ることができるだろう。我々の審議では、すべてが考え抜かれ、整然とし、一貫性があり、出来事が変化したためにのみ、決議が変化したのである。

III

会議が終わると、隅で談笑していたセグリ、モーリス・リシャール、パリューと、窓の窪みに立っていたリゴー提督を除いて、ほとんど全員が会議場を出て居間に行った。皇帝の居室に一瞬ついていったルブーフは、突然動揺してふてくされながら会議室に戻り、扉

の近くに置かれた小さな樫の家具の上に財布を投げて叫んだ。「皇帝がいなければ、私は5分もこんな内閣の一員でいられないだろう。この内閣は、その無意味さによって国の運命を危うくしているのである。セグリスは唖然として立ち止まり、リチャードが近づいて彼を落ち着かせる。"えーと、私の親愛なる同僚..."。オックスは彼の話を最後まで聞かず、身振りで彼を退け、「一人にしてくれ!」と言い、顔を紅潮させ、目を熱くしながら、私が先行していたサロンに入り、ピエトリとバションに近づき、彼らにこう言った：「予備役の召集は8票対4票で否決されました。恥ずべきことだ。あとは私が辞任すれば、フランスで最も人気のある男になれるだろう。ある者は皇帝を裏切り」、そして私を指差して「ここに皇帝を裏切る者がいる」と。あまりに大きな声で話すので、バションは「気をつけろ、オリビエ氏に聞こえるぞ」と言った。同僚たちは、この連邦保安官の暴走をしばしば非難していたが、私はそれに加わらなかった。自分が解放されたと信じていた恐ろしい責任のもとで、警告されることもなく突然拒絶されたと感じた感情が、軍人の魂の乱れた動きを説明しているのである。

我々の平和的解決のニュースは、皇后陛下とその一行が昼食のために待っているサロンで広まっていた。背に腹は代えられない。皇帝陛下の右隣に皇太子殿下、左隣に皇后陛下がいらっしゃる。皇后は私に話しかけないふりをし、私が話を振ると、ぎこちない言葉でほとんど答えず、私が離任について述べたことを捉えて「アントワーヌ神父」をバカにし、ついには私に背を

向けたのである。我々が帰るとき、彼女はほとんど礼儀正しくなかった。

サン＝クルーから会議場に行くと、宮廷の不満がより積極的な形で我々を待ち受けていました。ベンチの上では、熱烈なセッションの前触れとして、くぐもった激しい震えが伝わってくる。会議室でガンベッタは、顔を紅潮させながらミッチェルに近づき、彼の衣服を取って、苛立った口調で言った。「君の満足は、下品だ。ある警官が、勇敢なジャーナリストを挑発し、臆病者だと非難した。牧師の立場が強いときは、誰が彼に近づき、握手し、微笑みかけ、言葉を交わすかが問題であり、立場が弱くなると、誰が彼を避けるかが問題となる。その日、我々は遠くから挨拶されるだけだった。人々は立ち止まることなく、急いで我々の横を通り過ぎ、脇に寄らない人は弔意を持って我々と握手した。

グラモンはトリビューンに上がり、我々の宣言を読み上げる。ジェローム・ダヴィッドは、「父アントワーヌ」についての口論を再び始めたかったのだ、と問う。スペイン大使から、レオポルド・ド・ホーエンツォレルン王子がスペイン王位への立候補を断念したことを知らされました」とグラモンは答える。- 昨日、ホーエンツォレルン公爵ではなく、その父親から離縁があったという噂が流れました。- 廊下で流されるような噂に付き合う必要はないんだ」グラモンはそっけなく答えた。- このコミュニケーションは、法務大臣が廊下で、下院議員だけでなくジャーナリストや周囲

の人々に対して公然と行ったものである。グラモンはそれ以上答えず、デュベルノワが口を挟んだ。前日のような準備不足はもうない。朝、ルヘルに相談に行き、必要な保証を決めてきた。ルーヘルもこれに同調し、軍縮を要求するように促した。1月の試みが失敗し、そのことを友人のラ・ヴァレットがルーエに伝えた後、軍縮の問題を提起することは、プラハ条約の履行やライン方面の国境線の直線化を要求するのと同じくらい素早く、鋭い悪口の応酬によって戦争に突入することだったのである。こうして教え込まれたデュベルノワは、悪戯っぽく、自分のインタープリテーションの開発を早くしてほしいと下院に懇願する。我々の返事を待たずに、ジェローム・ダヴィッドは、グラモンを「アントワーヌ神父」の議論に巻き込んだことに腹を立て、再び立ち上がり、口笛を吹きながら、内閣に対する真の告発である解釈案を読み上げた。「7月6日の席上で省が行った愛国的で明確な宣言が、会議場と国の好意によって受け入れられたことを考慮すると、- これらの省の宣言は、プロイセンとの交渉の軽率な遅れに反対していることを考慮すると- （多くのベンチで大きな噂になっています。このような本省の宣言は、プロイセンとの交渉の遅れに反対するものであることを考えると、国外で行うことは、公金の各分野に混乱をもたらすばかりでなく、国家の尊厳を損なう危険もあることから、その原因を問うものである。（感嘆の声と各方面への動き）

ジェローム・ダヴィッドは、この侮蔑的な言葉を撤回することができた。右派の人々でさえも叫び、つぶや

く中、ゲームは一時的に失われた。危機に瀕したとき、多数派を動かし、情熱をもって採用したと思われる意見から正反対の意見へと拒絶する、こうした瞬間的な動きを、議会に出席したことのない人は理解できないだろう：すべての議会は人である。グラモンは、ジェローム・ダビッドの言葉に抗議し、話し合いの日を15日（金）にすることを提案した。Clément Duvernoisは出場しなかった。ジェローム・ダビッドは、これ以上口を挟むことはしなかった。ケラトリだけが、左派と右派の連合を封印し、「あなたはプロイセン国王に3日間の猶予を与えて最後通牒を突きつけたのである。」と主張した。この3日間の期限は一昨日までで、金曜日まで延期すれば、あなたを翻弄しているド・ビスマルク氏の術中にはまることになります。フランス人として、国の名において抗議する。ビスマルクがフランスと駆け引きをしていると考えたケラトリは間違っていなかったが、プロイセン国王に3日間の返答を与えたという考えはどこから出てきたのか分からない。- 議会で可決され、審議は金曜日まで延期された。そして、その顔は再び笑顔になった。ジェローム・ダビデの不器用な残忍さがあったからこそ、君たちは救われたのだ、それがなければ、君たちは今日倒されたのだ」と率直に言う人もいた。さらにリヨンは、わが国の勝利にもかかわらず、多数派の意向を誤解していなかった。「会議場では非常に激しい意見の表明はなかったが、会期末にグランビルに宛てて、「戦争党が優勢であることは明らかだ」と書いている。

グラモンはレギュラティヴ部隊から元老院に入った。そこでは、より強調されたデモンストレーションが彼を迎えていた。好戦的な焦りを表現するのは、彼次第だった。しかし、これでは全く話にならない!」と、宣言文の朗読の後、各方面から声が上がった。- プロイセンの態度は何も書いていない。- プラハ条約第5条は?」とララビットさんは付け加えた。- ユベール・ドリスル氏は、「あなたの通信は放棄について述べていますが、それが王子からなのか父親からなのか、プロイセンとの交渉の結果、何らかの同意が得られたのかどうかは書かれていません」と述べた。そして、国民の不安を一種の宥恕（ゆうじょう）する必要があると結んでいる。- 宥和の問題ではない、国家の尊厳の問題だ」とボンジャンは叫んだ。ブレニエはさらに、「皇帝の宣戦布告権が侵害されないことを証明する一方で、あなた方が宣戦布告すべきことを自ら証明する」と言い放った。グラモンはこの問題を議論することを拒否し、ただ「あなたがたが戦争を必要とすることを証明した日に、我々は戦争を起こす」と答えた。司会進行役となる長老たちが最も熱心であった。ヴァイランは手帳に「議会は最悪、議会はもっと最悪」と書いている。エミール・オリビエに対して極度の苛立ちがある。

IV

ビスマルクは、アベケンからベネデッティの動きを即座に知らされていたのだ。すぐに「国王がもう一度べ

ネデッティを迎えるなら辞職する」と電報を打った。返事がないので、「陛下が大使を別の機会にお迎えすれば、この事実を辞任の受諾と見なすだろう」と再度電報を打った。ベネデッティが、反省してますます不愉快になった要求を支持すると長く言い続けたので、王は、最後に言葉を交わした大使とこれ以上話をしないことを強く決意していたからである。彼はただ、この個人的な関係の中断を、フランスにとっても大使にとっても不愉快なものにしないよう、こだわり続けました。この意志は、正しいことを超えて、自分自身をコントロールできない君主につながる可能性のある出来事によって修正されることはなかったのである。午前8時57分、ヴェルターがグラモンと私との面会を報告し、アベケンに到着した。アベケンは、国王にこのことを話す前に、午前11時15分に到着すると発表されたオイレンブルクとカンフーセンの二人の内務・財務大臣に相談したいと考えたのである。15.彼らは、電報で報告を受けたビスマルクがそう思うだろうと判断し、この文書を伝達することには賛成しなかった。彼らは国王のもとを訪れ、宰相が旅を続けなかった理由を説明し、すでに2度電報で伝えたベネデッティとの関係を絶つようにという忠告を支持した。そうしなければ、ドイツにおける国王の威信が大きく傷つき、フランスへの降伏とみなされる撤退の責任を負うことになり、ビスマルクはその地位を手放すだろう。

国王がヴェルターからの知らせはなかったのかと尋ねると、アベケンは、確かに朝には報告があり、ベルリンに転送したが、二人の大臣はこの文書は公式に陛下

に伝えるような性質のものではないと考えていると答えた。「さて!」国王は、「我々が単なる私人であるとちょっと考えて、それを私に読んでみてください。ヴェルターの報告は、特にビスマルクの代理人が読んで解釈したとき、彼に激しい憤りを生じさせた。このような横柄な態度を見たことがあるだろうか」と女王に書き送った。その時、私は自分が仕掛けたわけでも、指揮したわけでも、導いたわけでもない事柄について、悔い改めた罪人として世間の前に姿を現さなければなりませんが、それはプリムであり、彼はゲームから取り残されているのである。残念ながら、ヴェルターはそのような主張をしてもすぐには退席せず、ビスマルク公使のもとに間男を送り込んだ。ベネデッティを担当させるとまで言い出したのだ。残念ながら、これらの不可解な手順から、彼らは何としても我々を挑発することを決意し、皇帝は自分のことながら、この未熟な実行者たちに導かれることを許していると結論づけざるを得ません。

最初の動きが落ち着いた後、国王は、これがフランス政府からの正式な提案ではなく、二人の大臣が自分の名前で話した単なる提案であることを理解せざるを得なかった。しかも、ヴェルターとの会話の後に指示が来たベネデッティが、ヴェルターが誤って発表したように、謝罪の手紙を出せと命じられていないことを、まさにその朝、確認することができたのである。その時、彼の本当の恨みは、我々よりもヴェルターに対するものだった。大使が我々の要求を認めたことで、王には償うべき誤りがあることを暗に認めたことにな

り、それは確かに我々と王の心の中にあった。王はこの仮定に反抗しなかったことに傷つき、アベケンにこう書き送った。「しかし、私がグラモント・オリビエの提案（zumuthung）に憤り、下心を保留することをヴェルターに伝えることが肝要である。このような下心が出るはずもなく、「未熟な実行者」たちは、自分の尊厳を尊重するあまり、他人の尊厳を傷つけるようなことはしないということを示したのであろう。したがって、ヴェルターが報告しても、王のベネデッティに対する態度は変わらなかった。もしベネデッティが存在しなければ、大使は受け取られなかっただろう。ベネデッティがこの事件を疑わなかったほど、大使に派遣された副官の礼儀正しい態度は変わらなかったのだ。外交文書が公開されただけで、彼はこの報道を後で知り、それを不当に利用したのである。

V

2時、ラジヴィル副官はベネデッティに会いに行ったが、前日約束した国王への呼び出しではなく、アンソニー皇太子からの約束の手紙が1時に到着したことを伝えるためであった。これは、観客を初めて拒否したことになる。ラツィヴィルは、アンソニー王子の手紙は、レオポルド王子がスペイン王位への立候補を取り下げたことを陛下に知らせたもので、陛下はこの問題を終わったとお考えになったのだと説明した。ベネデッティは、この通信に対する国王への感謝として、王子の辞退に伴い、国王の明確な承認を得て送信する許

可を常に求めてきたと述べ、さらに、午前中に国王と話をする栄誉を得た主題について主張せざるを得ない新しい電報を受け取ったと述べた。陛下が与えようとしている情報を大臣に伝える前に、この2点について確定しておく必要があると考え、フランス政府の希望を改めて伝えるために謁見を希望したことを述べた。国王は副官から（3時）、王子の辞退について、立候補の承諾と同じ精神と感覚で承諾したこと、この宣言を政府に伝える権限を与えたこと、今後の約束については、朝自身が通告したことに言及したことを回答させた。これは、2度目の視聴拒否である。しかし、ベネデッティは、「陛下がおっしゃったことをもう一度聞くためなら」と、最終面接に応じました。そして、国王からの新たな返事を待たずに、グラモンに今持ってきたばかりの返事を電報で送った（午前3時45分）。

どんな譲歩も得られないと確信していたベネデッティは、王が自分の言ったことを強い言葉で繰り返されても困ることはない、主張することは無粋で、不快な反発を受けることになると理解していたはずである。グラモンが彼に指示を出したのは間違いないが、大臣が王の心境を正確に把握することはできないし、もし彼がその場にいたら、間違いなく命令を繰り返すことはなかっただろう。大使の不用意な働きかけの結果は、すぐに現れた。最も絶対的な形で拒否された後、彼の強迫観念に疲れた国王は、ビスマルクに訴えた。彼は、事情を話して、この問題を自分の手に委ねるように命じた。これは、アベケンから200字の電報が、午

前3時40分にベルリンに数字で送られてきた。「エムズ、私は、このままではいけない。40 からベルリンへ 「エムス、7 月 13 日、3.40.- ベネデッティ伯爵は遊歩道で私を呼び止め、ホーエンツォレルン家が再び申請してきた場合、今後承諾しないことを約束する電報をすぐに打たせてほしいと、非常に緊急の態度で最後に頼みました。そんな約束は永遠にすべきでないし、できないので、最終的にはかなり真剣にお断りした。私はもちろん、まだ何も受け取っていないことを告げ、パリとマドリッドから先に情報を得ていたので、これによって私の政府が再び問題外であることが分かった。陛下はその後、シャルル・アントワーヌ皇太子から手紙を受け取られました。陛下はベネデッティ伯爵に、皇太子からの知らせを待っているとおっしゃったので、オイレンブルク伯爵と私の提案で、上記の主張を理由にベネデッティ伯爵をこれ以上迎えないことにし、副官から、伯爵がすでにパリから受け取った知らせの確認を今陛下が皇太子から受け取り、大使にはもう何も言うことはないことを伝えさせました。陛下はベネデッティ伯爵の新たな主張とその拒否を直ちに我が国の閣僚、外国人、報道機関に伝えるかどうかを閣下にご一任されました。

王は静かに食事をし、ラジヴィルを3度目に送ってベネデッティとの関係を終えた（午前5時30分）。副官は、やはり非常に丁寧に、国王は「将来の保証に関する議論を再びすることはできない、王子の撤退を全面的かつ無条件に承認することに同意する、それ以上はできない」と繰り返した。ベネデッティは3回目の謁

見拒否をしたが、その迷惑は十分に免れることができた。

アベケンの署名入りのこの電報は、ビスマルクの道具立てであるオイレンブルクとカンフーゼンとの合意で作成されたものである。これは、ラジウィルの報告書によって確認された真実を初めて、そして非常に重大に改ざんすることになる。私は、フランス人作家の軽薄さが注意を払わなかったこの資本事情が、ドイツの歴史評論家によって指摘されたことに、嬉しい驚きを覚えた。「アベケンの派遣は、事件の正確な姿をまったく伝えていない」とラートレフは言っている。国王の態度のどこが慈悲深いのかが明らかにされず、副官によるさまざまな派遣や彼が提出しなければならなかったさまざまな提案について何も書かれていないため、また何よりも、国王がフランスからの要求をすべて一括して拒否したと思わせるため、すでに悪化しているように見えますが、3件のうち2件は認めていたのである。しかし、3番目の要求である保証だけは、ベルリンでの交渉の可能性を排除することなく、拒否した。しかも、この電報には、大使が遊歩道で国王を呼び止めたという不適切な記述があり、大使のところに行ったのは国王であった。この改ざんは、ビスマルクに与えられた、ベネデッティの新しい主張とそれを受け入れないことを、大臣や外国人、マスコミに伝えるかどうかを決める権限によって、さらに悪化した。この公表の許可は、外交上ありえない行為である。実際、交渉が続く限り、その出来事の秘密は細心の注意を払って守られなければならないことは、議論の余地

のないルールであり、不変の伝統として刻み込まれている。7月6日にギャラリーで公然と発言したのは、ベルリンとマドリードで交渉が拒否されたからにほかならない。

国王は保証の要請を拒否した、それは国王の権利であり、ベネデッティを迎えることを拒否した、それはすでに最後の言葉を述べたからであり、それはやはり国王の権利であり、エムスで起こったことを電報で大臣に伝えた、それはやはり国王の権利であり、しかしこれらがすべて終わった後、国民を信任する前に、我々がその拒否に対して行うであろう返答を待っている厳しい義務があるのだった。もし、彼がこの義務を果たしていれば、我々は彼の承諾に留意し、保証の要請を取り下げただろう。12日の夜にはまだ平和が続いていただろうが、この平和はそれほど勝利したものではなく、部分的に失敗すればその輝きは失われただろう。しかし、ある面では、プロイセン王がこうして最初の失敗を緩和したことで、我々に対する自尊心の恨みを抱かなくなるという利点もなかったわけではないだろう。この拒否を早々に公表したことで、彼はベルリンでの交渉再開の可能性を事実上封じ込めたのであり、ラスレフの発言によれば、この電報の文面そのものが認めていたのである。アベケンの派遣をさせたとき、ブッシュが国王に言った言葉が理解できる。「これでビスマルクも喜んでくれるだろう」。

VI

ビスマルクは13日、ベルリン到着以来陥っていた激情と不安と絶望の危機の中で、檻の中に閉じ込められたライオンのように咆哮しながら過ごしていた。重く考えれば考えるほど、この出来事は彼にとって耐え難い結果に満ちているように思われた。彼は取ったつもりが取られ、利益のない自分を発見し、彼の王は妥協した。彼は平和な夢から我々を目覚めさせ、今後は警戒しなければならない。ヨーロッパは彼の心強い宣言の価値を認め、ドイツにおけるプロシアの名声は低下し、プロシア剣の下の統一は遅れることになった。フランスよ、私は燃えるような怒りに燃えている。その怒りは、血、血、そして最も貴重とされるフランスの血以外には鎮めることができないという特殊性を持っている」。ビスマルクは、イギリス大使ロフタスが危機の解決を祝いに来たとき、この放棄が紛争を解決することになるとは思えないと述べた。ブレーメンやクーニヒスベルクなどから、国王の融和的な態度を強く非難し、国の名誉を守るよう求める通信を受け取ったという。彼のやり方に慣れていたイギリス大使は、彼の企みを察知していた。「もし何らかの時宜を得た助言と友好的な手が介入して、両政府間に存在する苛立ちを静めなければ、スペインの問題が解決される代わりに、溝はおそらく広がる一方だろう」。ビスマルク伯爵とプロイセン省は、ベネデッティ伯爵に対する国王の態度とその処分を残念に思い、ドイツ世論のために、国家の名誉を守るために何らかの断固とした措置が必要であると感じていることは明らかである。

その決め手となるのは何だろうか。ビスマルクは、我々が主張するアルメニア人について説明を求めることも考えたし、スペイン問題の現在の解決策が我々の要求に満足のいく形で応え、後にいかなる主張もなされないことを認識し、フランスが列強に与える何らかの保証を望むこともあった。"スペインの難題が取り除かれた今、雷鳴のように我々を襲う神秘的な計画がまだあるのではないか?" と彼は言った。そしてついに、彼はわれわれに直接召集令状を送るという考えに至った。彼はギャラリーでグラモンの言葉を撤回するか説明するために我々を召集し、「国家と国王に対する脅威であり侮辱である。」と糾弾したことだろう。フランス外相が欧州を前にしてプロイセンに語った言葉を受けて、「フランス大使との関係を維持する」ことができなくなったのである。この攻撃的な性格は、言葉だけでは表せなかった。彼の合図でドイツの報道陣は声を上げたり下げたりした。彼は、我々がホーエンツォレルン家を追い出さず、襲撃者を装わざるを得ないことを当てにしている間は、非公式な性格を持つことが知られている新聞を、嘲笑的でほとんど無関心な冷静に保っていたが、失敗すると、新聞を解き放ち、侮辱的なものに仕上げた。彼は自ら、完全に公的な出版物である『コレスポンデンス』誌に脅迫的な記事を掲載し、我々にしかできないこととして、フランスの攻撃的な態度が両国の関係に残すであろう残念な痕跡を訴えたのである。

そんな中、エムズからヴェルターの報告を受けた。戦争を収束させるための手段を猛然と探している中で、

もし彼がプロイセン大使との会話を謝罪の手紙の要請ともっともらしく考えることができたなら、彼は口実以上の正当な理由を一度に手にして、それを逃すことはなかっただろう。怒りはあっても、彼はあまりに政治家気取りで、本人が証言していないインタビューから戦争の理由を見つける権限があるとは思っていなかった。最近、ベネデッティについて書いたことを思い出したのだろう。「ベネデッティ伯爵が私の見方をできるだけ正確に再現しようとしたのは間違いないのであるが、視点や個人的な印象の違いは、長い会話の詳細を要約して説明することで、行われた意見交換の全体を真の光の中に浮かび上がらせ、その内容をインタビューの残りの部分と関連づけて再現した場合に、それぞれに正確に重要な部分再現を残しておくことは必ずしもできない影響を及ぼしているのである。"そこで、彼はエムスに電報を打ち、ヴェルターの派遣を国王に伝えず、無効とするよう指示した。このように、ベルリンでもエムスでも、ヴェルターの報告は交渉に少しも影響を与えず、その方向性を変えることはなかったのである。ビスマルクの側にいたケーデルは、「この報告は、わが国の代表者に、即時解任のほかに、このような攻撃的な提案を自己満足で解釈していたことに対する厳しい叱責を加えること以外の結果をもたらさなかった」と記している。フランス側では、我々に対してこのような質問は一切ないだった。"ビスマルクがヴェルターを呼び戻したのは、ヴェルターが水薬の必要性で旅立ったことを説明しなければならないから、我々との決別を意味するためではなく、正直者としての彼の純真さが、我々の苦情を聞くことに

よって、その正当性を認めているように見えたことに対する罰として彼を呼び戻したのだ。パリに期待することは何もないと思ったビスマルクは、エムスに耳を傾けた。そこから、自分が決めた戦争を始めるための手段を見つけ出すのである。ベネデッティに嫌がらせの電報を打った後、国王はベネデッティにどのような態度をとっただろうか。

VII

ルーンとモルトケはベルリンにいた。ルーンは10日に、モルトケは13日に到着していた。その日、ビスマルクは彼らを夕食に招待し、一緒に決定的な知らせを受けることができた。それは、グラモンが13日の宣言を読み上げた会議の報告書であった。2時半に通訳が終わると、すぐにプロイセン大使館や各機関から報告書が送られてきた。ビスマルクは、鋭い洞察力でその意味を理解した。したがって、新たな問題を提起することはなく、プラハ条約を無視したことに対する非難も、ドイツの統一に対する留保も、一言で言えば国民の感受性を刺激するようなこともない。現在の交渉に関する我々の柔らかい文章は、7月6日の我々の最後通告の威力と比較して、我々が和解する準備ができており、対立を解き放つような唯一の我々の要求、将来の保証に固執することはないという確信を与えてくれた。だから、12日の夕方になっても、まだ平和だった。必要な戦争が、二度目にして彼から遠ざかっていく。彼の怒りは、鈍い落胆に変わった。こうしてモル

トケとルーンは彼を発見したのである。彼は彼らに退却の段取りを確認した。国王が自らを飲み込むことを許していることは明白であり、ホーエンツォレルン家の放棄は国王によって聖別された事実となる可能性が高く、そのような退却では国王側につくことができない。ルーンとモルトケはこの決議に反対した。「あなた方の立場は私とは違います。特別閣僚として、これから起こることに責任を持つことはできません。しかし、外務大臣として、名誉なき和平に責任を持つことはできません。プロイセンが1866年に勝ち取った後光は、「彼女はできる」という考えを国民に広めることができれば、彼女の額から落ちるだろう。

寂しく夕食の席についた。6時30分、アベケンからの通信が届いた。ビスマルクが読んだこの素っ気ない文書は、もちろん毒がないわけではなかったが、不遜な態度を強調することもなく、何より交渉の扉を開いたまま、フランスを戦争の必要性に追い込まないものだった。これを読んだ二人の将軍は、驚愕のあまり飲食を忘れてしまった。ビスマルクはこの文書を何度も読み返したが、突然モルトケに向かって、「紛争を遅らせることが我々の利益になるのか?- モルトケはこう答えた。「われわれには、それを促進するあらゆる利点がある」。最初はライン川左岸を守るには力不足でも、戦場に入る速度はすぐにフランスを凌ぐだろう。スペイン政府からフランス政府に、ホーエンツォレルン家の世襲皇太子放棄の知らせが伝わったとき、フランス大使はエムスの国王陛下に、ホーエンツォレルン家が立候補に戻れば、陛下は今後しばらくは二度と承

諾しないことをパリに電報で伝える権限を与えるよう依頼した」。そこで陛下は、フランス大使を再び迎えることを拒否し、当直の副官を派遣して、陛下にはこれ以上お伝えすることはないと告げさせました。

この文書は、それ自体がすでに改竄された文書の改竄である[1]。アベケンの偽証は、それがどんなに重大なものであっても、まだ謙虚さを保っていた。ベネデッティの要請と王の拒否の間に、話し合いのやりとりがあったことをほのめかすもので、ビスマルクはその痕跡をすべて消し去った。ベネデッティが「水路のプロムナード」で行った王の議論、ホーエンツォレルン家からの手紙の大使への通知、この手紙の到着を知らせる准将の派遣を排除し、残るのは移行も説明も議論もない要求と残酷な拒否だけである。アベケンの泥臭い発信は、辛辣で、闊達で、傲慢で、ニグラの嬉しい表現で言えば、厳しく饒舌になるのだ。エムスから送られた砲弾は、ロケットでは何の効果もなく爆発する運命にある導火線だけだったが、ビスマルクは、地面に触れるや否や雷鳴を響かせる優れた導火線を装備している。

もしビスマルクの操作が、このような削除と形式の集中にとどまっていたなら、アベケンの文書を改竄したという非難は十分に正当化されただろう。ビスマルクはこの事実を、本質的なもの、あるいはよりよく言えば、派遣のすべてであるかのように前面に押し出した。ビスマルクの文章は、国王がベネデッティの受け取りを拒否したというのは嘘ではなく、事実を誤解

し、自然な行為を攻撃的な意図に変えてしまったため、電報は「プロイセン王がフランス大使の受け入れを拒否した」という一言に集約されることになったのだ。

最後に、これまでのものよりも変態的な第三の悪化が含まれていた。アベケンの派遣状には、国王が、規定することなく、公表することを許可していた.....何?大使の受け入れを拒否したこと、つまり、王家の兄弟の代表に対して門戸を閉ざしたことを世間に知らせることは、決して許可されておらず、宰相の命令に従ったまでだ。一方、ビスマルクはこれを超えて、何よりも明らかにすることが許されなかったことを明らかにする。

こうして電報ができ、宣伝も決まり、あとは電報を発射して、電光石火の効果を発揮させるだけである。ビスマルクは、「成功するかどうかは、何よりも戦争の発端が我々と他の人々に与える印象にかかっている」と、その進め方を説明した。我々が攻撃される側になることが不可欠である。ガリア人の思い込みと感受性の強さは、フランスの公的侮辱を恐れることなく受け入れると、帝国議会を介さずに可能な限りヨーロッパに公言すれば、この役割を与えてくれるだろう。なぜ、帝国議会での議論ではなく、ヨーロッパへの例外的な通信によって、拒否を通告することがそれほど重要だったのだろうか。なぜなら、ギャラリーでの大臣の必然的な説明から生じる義務的な宣伝は、異常なコ

ミュニケーションから生じる自発的な宣伝のような挑発的な性格を持たないからである。

首相は、我々に打撃を与えるだけでは不十分で、この打撃が、もはや返さないことが許されないほどの衝撃を与えることを望んでいるのである。今、陛下からいただいた許可をもとに、「すぐに新聞社に送り、さらにすべての大使館に電報を打てば、夜半前にはパリに知れ渡るだろう。戦わずに負けていると思われたくなければ、戦わなければならないのである。この説明により、二人の将軍の憂鬱な表情は一掃され、ビスマルクも驚くほどの明るさを取り戻した。また、食べたり飲んだりするようになる。ルーンは言う、「昔の神はまだ生きていて、我々を恥ずかしげもなく屈服させることはないだろう。モルトケは「さっきは太鼓の音が聞こえたと思ったが、今はファンファーレだ」と絶賛している。天井を陽気に眺めながら、手で胸を打つ。「もし私がこのような戦争で軍隊を率いるまで生きていたら、この老いぼれは悪魔に奪われるかもしれない。

VIII

二人の将軍が偽の派遣の意味、意図、効果について下した判断は、その後、すべての誠実で真面目なドイツ人によって確認されました。サイベル自身は、一瞬、無敵の偏見を捨て、勝者の横柄さと、専門家の歴史家の正確さをもって、1866年にイタリア軍に購入したク

ロアチア軍団の攻撃を勧めた待ち伏せ屋にふさわしいこの作戦を要約する：「より簡潔な形式と決定的な状況の省略によって、通信の印象は完全に変化した。フランス人は、この苦い薬を飲み込むか、それとも脅しを実行に移すか、決断しなければならないのだ。- ラスレフによれば、「この報告書はエムズで起こったことの報告書であり、歴史的な報告書としては、誤解を招いたり、大使が被らなかったことを被ったり、王が被らないように、あるいは被れるように行動したのではないかという疑念を招きやすい」という。礼儀正しくも毅然とした返事をしたものが、無礼講のように思われ、王は自分を怒らせるような提案には、決して怒らない返事をする人だったのだと思わせるかもしれません。エムス派遣の中で最も不快で、ドイツ人にとって最も苦痛なのは、まず第一に、この派遣が喚起する誤った表現である。ビスマルクが在任中にフランスから受けたすべての侮辱に対する返答であり、200年にわたるフランスの行為に対する最終的な返答であったのだ。このようなニュースの公式・非公式な伝播は、まさに事実の正確な人相を伝えていないために、フランスへの挑戦とみなされ、賞賛されたのであり、フランスに対する真の侮辱を構成した事実を無視するのは、まったく不当である。ビスマルクは、このようなドイツに対する行動を、間違いなく違反行為と見なしただろう。- この出来事に関するドイツの説明は、この誤りを完全に認識しておらず、この点で、彼らは不当である。- カール・ブライブトレン氏は、この電報には間違いなく「計画的な公共犯罪、公共の暴挙」が含まれていると率直に述べ、さらに「間違いなく許し

がたい犯罪を構成している」とまで言って、この事実を立派に公正に判断しているのだ。ラジウィルが伝えたようなニュースや宣言の交換は一切なく、一般的で簡潔な拒否の言葉だった」とエーリッヒ・マーキーは言う。この派遣によれば、国王は、ビスマルクとその友人たちが自分の代わりに行ったであろうことを行っており、防衛から最も無節操で取り返しのつかない攻撃へと、移行することなく移行した。この派遣は、フランスの面目躍如たるものであり、その結果、フランスは戦争に踏み切らざるを得なくなった。このページの冒頭にある「蛇腹」という言葉は、この判決から拝借したものである。

IX

ビスマルクは早速その計画を実行に移した。この電報を非公式な新聞『北ドイツ新聞』に送り、特別付録としてすぐに掲載し、壁に貼るようにした。夜9時からは、ベルリンの街角や人の出入りの多い場所に大勢の運び屋が現れ、電報を伝える付録を無料で配布した。今、私の目の前には、この致命的なニュースを書いたプラカードがあり、すぐにカフェの窓に貼り付けられ、多くのグループによって読まれ、コメントされた。菩提樹の大通りに、夜中まで大勢の人が行き交った。群衆の狼狽ぶりは、『ファルサロス』の詩人が語った「Exstat sine voce dolor」という偉大な沈黙の痛みを思い起こさせた。血なまぐさい闘争と恐ろしい大災害を予感させるニュースに驚き、狼狽するこの人々の

姿に、私は正直言って、何か胸が痛むものを感じたのだ。

また、別の目撃者は、群衆の武骨な印象に特に心を打たれたようだ。タイムズの記者は「この一枚の印刷物が町にもたらした影響はひどいものだった」と言う。老いも若きも、父親も若者も、婦人も少女も、何度も読み返し、愛国心に駆られ、ついにはメイドに受け継がれた。国王の男らしく威厳のある行動に対する意見はただ一つ、国王に倣って国民の前に投げられた手袋を上げる決意はただ一つであった。10時、王宮前広場は興奮した群衆で埋め尽くされた。国王を称える声と「ライン川へ」という叫び声が四方から聞こえてきた。市内の他の地域でも同様のデモが行われた。長い間抑圧されていた怒りが爆発したのだ。- 何千もの声が一つになり、その奥から歓喜の叫びが上がり、男たちは歓喜の涙を流して抱き合い、王への歓声が空気を揺らした」とシベルは言う。将軍たちを興奮させたファンファーレは、今やベルリンを持ち上げていた。外交官たちは、目の前で起こっている騒々しい出来事の意味を取り違えてはいなかった。オランダのバイラント公使は，北ドイツ新聞の付録を読んだ後，急いで家に帰り，それを翻訳して，「戦争は今や確実だ」という簡単な言葉とともに政府に送ったと，私の友人に語った。

この電報は、11時半にドレスデン、ハンブルク、ミュンヘン、シュトゥットガルトのプロイセン公使に、2時半にペテルブルク、フィレンツェ、ブリュッセル、

ローマに送られた。14日の朝、『プロイセン・モニター』紙は、この記事を非公式なセクションの先頭に掲載した。壁に貼られ、通りで叫ばれ、官報で認証される間、電信機関は新聞が浸透するすべての地域にそれを投げかけた。最後に、主要な首都で、北方連合の大使や公使が外相のところに行き、公式に通達した。あらゆる言語で、あらゆる国で、ビスマルクが仕掛けた攻撃的な改竄が行われた。この恐ろしい宣伝の効果は、まずドイツで、ベルリンと同じように強烈に感じられた。「ベネデッティに与えられた休職は、フランスにとって過酷で攻撃的な内容を含んでいると思われたからこそ、喜びをもって迎えられた。

新聞は荒れ放題だった。風刺画の背景には、エムズの王のアパートの最初の部屋と遊歩道に面した窓があり、手前には恥ずかしくてフードをかぶった正装のベネデッティが、副官に呼び止められ、悪戯っぽい目で行く手を阻まれている。王は突然彼に背を向けて副官に「この男性にはもう答えないと言ってくれ、もう会うことはない」と言っていたと言われる。国王の動員令が出る前から、民衆は一人一人の魂を込めて立ち上がった。この強烈な感動は、エムズ派遣の仕業である。この派遣は、ドイツの「ミッヒ」の聖なる怒りである「フロール・テイトニックス」を解き放った。

国王は、国民と同様に宰相の作戦の効果を実感していた。14日の朝、エムスのプロムナード・デ・ソースにいた彼は、ラジウィルが書いた報告書とは似ても似つかない手配電報を渡された。彼はそれを2度読み、非

常に感動して、一緒にいたオイレンブルクに手渡し、「これは戦争だ」と言った。- 戦争だ!」ベルンのプロイセン公使は同時に、国王の絶叫を聞いたかのように言った。我が国の公使であるコマンズ・ギトーは、所用のため連邦宮殿に向かっていた。ちょうどその時、プロイセン公使のレダー伯爵が盟主の家を出て行くところであった。レダーはコマンズ・ギトーの姿を見るや否や、近づいてきて言った。敵同士になる前に、最後にもう一度、手を取り合おうではないか。唖然としたコミンゲスは、「それでは宣戦布告か」と叫んだ。- しかし、そうだ」とレダーは答えた。「昨夜届いた電報によると、国王はベネデッティ伯爵を迎えることを拒否し、フランスの要求を拒否すると通告してきた。ギタウはドゥブス大統領に近づくと、まずこう言った。「このように宣戦布告されるのであるか?- プロイセン公使からそのような報告を受けたところである。」と答えた。

こうして14日、わが国の報道機関や政府が一言も発しないうちに、ドイツの端から端まで、群衆は本能的に電報を「戦争」と解釈したのである。そして、この恐ろしい言葉は、パリで内閣が平和維持のために精力的に、そして希望なくしてはない努力をしているときに、ドイツが発したものである。

X

エムスやベルリンからの決定的な知らせがない中、会議場の席から13日のかなり夜遅くまで、パリでは刻々と精神の高ぶりが激しさを増してきた。それに対する我々の回答は、ほぼ全面的に非難を浴びました。Le Paysは、つまみ食いされるような記事の中で、「我々は、指導者に絶望し、剣を折って投げつける将校たちの状況にある」と述べた。フランスを脅かす恥部を追い払う力のないこのペンを、我々はいまだに手にすることに同意しているのは、悲しみと、ほとんど嫌悪感とともにあるのである。それは、宰相が、実のところ、比類なき純真さで、アントワーヌ公の派遣によってすべてが解決されると、心から信じていたからである。さて、このグロテスクでカコイイ老人、デュカンタル神父、アントワーヌ神父、すでにそう呼ばれているが、誰も話さず、誰も知らない、何も言うことがない、この老人がこれらと何の関係があるのだろう?息子のレオポルド皇太子は35歳なので年齢以上に、父親の戯言に用はない。彼は受け入れるために彼に相談しなかった、彼は拒否するために彼に相談する必要はない。ド・グラモンはプロイセンに語りかけ、アントワーヌ神父はそれに答える。しかし、我が国を卑下することに滑稽さを見出すのであれば、これほど滑稽なことはないだろう。保証もなく、確実性もなく、老人の派遣に頼っているこの賞を、国民的衝動に駆られたフランスに差し出そうというのであるか?プロイセンは黙っている。プロイセンは答えを拒否し、軽蔑的な沈黙を守っている。そして、我々を統治する弁護士たちは、先日の答弁に満足し、依頼人であるフランスを見捨て、その名誉、尊厳、利益についてこれ以上心配す

ることはないのだ!」。ああ!もし出来事がこのように決定的な展開を迎えるなら、フランス人であることを恥じ、プロイセン人に国有化されることを求めることになるだろう!」。しかし、それは不可能なことであり、皇帝はこれ以上、塵に額を曲げて我々を放置しておくことはできない。昨夜、大通りは不安な群衆で埋め尽くされ、学生のバンドがChant du Départを歌いながら通りを歩き回った。5日前から、フランスは戦うことを決めた。人々はつぶやき、これ以上後退するのかと問う。フランスは、自国を守り、保護し、援護する方法を知らない大臣たちに反旗を翻し、皇帝に至高の訴えをするのである。このようなおしゃべりな人たち、空虚でむなしい言葉の製造者たちを一掃し、我々を行為に向かわせましょう。- ポール・ド・カサニャック

"最新ニュース- 3時だ- 撤退が完了した。グラモン公の機関紙を通じて、フランスはアントワーヌ・ド・ホーエンゾレルン公の派遣に満足していると宣言している。このミニストリーは、今後、「誠実のミニストリー」と名付けます。- P. DE C."

今となっては、誰もが戦争に反対していたことが認められますが、あの日の午後の言葉を思い出すと、ある人たちを驚かせることになるだろう。あなたは理解できない」と言われ、「あなたは国民投票の大臣だ。勝利の大臣になれるのに、なりたくないのか!」と言われました。多くの犠牲と忍耐、断絶の代償として苦心して征服してきたものが、失われるか、妥協されるこ

とになるのである。国を勝利に導いた右派は、それを利用して情熱を満たし、怨念を晴らすだろう。自由主義的な制度をゆがめ、公式の立候補を再開し、委員会から独立した候補者を追い出し、自分たちの感情によって動く多数派を作り出し、あなた方がまだ概略しか知らない調停、和解、再生の仕事を邪魔するだろう」。- 世間の軽蔑の中で、決心も勇気もない人間のように、無力になり孤立してしまうかもしれませんが、私はこの信用に直面することを恐れていません。フランスの尊厳と名誉が脅かされていると確信するとき、私は真っ先に戦争の叫びを上げるだろうし、立候補が撤回されなかったらそうすることを躊躇しなかっただろう。しかし、それは消えようとしている。そしてあなたは、一時の感情に乗じて、私の個人または体制を強化するためだけの目的で流血事業に従事することを我が政府に望むのか?あなたは戦争の結果について誤解している、と私は付け加えた。勝利は確実だ、私もそう思う。大なり小なり、すべての戦争関係者はそれを約束する。 しかし、この勝利で何をするのか? ライン川を奪うのか? ゲーテの故郷フランクフルト、ベートーベンの故郷ボン、ドイツの若者の巣窟ハイデルベルクをフランスに追いやるのか?何の権利があって?我々フランスの民族理論によれば、征服はもはや正当な取得の称号ではない。ドイツが獲物の持ち主であるあなた方を放っておくとでも思っているのだろうか。離ればなれになった子供たちは、彼女に向かって手を差し伸べることをやめず、彼らの解放が実現するまで戦争は続くだろう。オーストリアがベニスを押さえたように、我々はライン諸州を押さえることはでき

ないだろう。そして、道徳的な結果だけを考えるなら、このような文明的な二国間の戦争は、なんという災難であろうか。戦いと征服に熱心な野蛮なドイツ、ホベローのドイツ、独善的で不義理なドイツ、中身のない解明や顕微鏡的な研究をしているわけのわからない衒学者のドイツがあるのは間違いない。しかし、この二つのドイツは、芸術家、詩人、思想家、バッハ、モーツァルト、ベートーベン、ゲーテ、シラー、アンリ・ハイネ、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、リービッヒなどの偉大なドイツとは違う。そっちはいい、寛大だ。それは、われわれを敵視して書くように言われ、フランス人を憎む心を見出すことができないと答えたゲーテの感動的な言葉の中に描かれている。もしわれわれがドイツ統一の自然な動きに反対せず、それが連続した段階を経て静かに進行するのを許すならば、それは野蛮なドイツや詭弁的なドイツに覇権を与えるのではなく、知的で文明的なドイツにそれを確保することになるであろう。それどころか、この戦争によって、ホベローとペダンのドイツが、数え切れないほどの長期間にわたって支配することになるのだ。

数時間の間に、私を説得しようと駆け寄る人たちに、疲れ果てるほど何度この主張を繰り返したことだろう。他の閣僚も、普段からマスコミと交流があったこともあり、負けず劣らず精力的に闘った。グラモンは一人、ベネデッティと対話を続けた。夜8時半に、「予告していたように、国民感情は過剰に興奮しており、説明するために金曜日まで待つことは非常に困難である。」と電報を打った。国王に最後の努力をし、

ホーエンツォレルン公が離反することを禁ずるよう求めるにとどめていることを伝え、国王が「私が禁ずる」と言い、あなたに手紙を出すことを許可するか、大臣か大使に私に知らせるよう指示すれば、それで十分だろう。ヨーロッパの他の国々は、我々を公正で穏健な国だと思っているはずである。アレクサンダー皇帝は、我々を温かくサポートしてくれます。いずれにせよ、エムズを出て、肯定か否定かの答えを持ってパリに来なさい...」と。この通信を書いた後しばらくして、彼がヨーロッパの好意的な感情を妄信していたことを示す証拠が届き、その確証をベネデッティに送りました。8時半になると、サンヴァリエから勇ましい警告が届いた。「南ドイツでは、プロイセンに対する新たな主張は、戦争を好む証拠とみなされ、ホーエンツォレルン問題は口実であり、我々が戦争を望んでいるという意見が広まっていることを証明することになる。放棄することで状況が変わり、承認してくれた人が非難し、さらに保証を求めると立場が悪くなる。
我々は、この紛争における南の中立を期待することができましたが（なんという間違い!）、今日、それを期待する必要はないだろう。反プロイセン派の間でさえ、もはや我々に好意的な意見はない。我々が戦争を望むのは、内部の困惑から逃れるためだと言われています。2日前に好意的に受け入れられた我々の平和宣言は、もはや何の信憑性もない。ドヴァーンビュラー氏は絶望し、昨日の朝プロイセンからの通信に与えた冷たく回避的な受け取りから、同情的な態度に変わってしまったのである。外交官の言葉は、我々とは逆になりつつあります。ベウスト自身、グラモンに「物事

を極端に推し進めるのは間違いであり、南部諸州の気質を判断できるのは彼以外にいない、フランスが南部諸州の同情を当てにするならば、大きな誤りを犯すことになると確信している」と伝えた。ペテルブルグから、フルーリーも負けず劣らずの誠意を見せてくれた。ゴルチャコフがいない間、彼はツァーリに会っていたのだ。保証要請の文章を見せる前に、アレクサンダーは怒りに燃えてしまった。「私は戦争を避けるために多大な努力を払ってきた。あなたは戦争を望むのか?そして、フルーリーが我々の名誉について話すと、彼は鋭くこう言い返した、「あなたの名誉!他の人の名誉も?グラモントの派遣を熟読した彼は、落ち着きを取り戻したが、再び叔父に介入することを拒んだ。プロイセン王のプライドが傷つき、レオポルド公爵の離反で傷ついた国民感情を目の当たりにしているのだ。

XI

このような警告と同時に、夕方には嬉しい知らせも届いた。オロサガがやってきて、政府から承認が下りたこと、アントニー公にはその旨を伝え、自分は申請には関知しないことを告げました。しかし、現実はそれほど進んでいなかった。セラーノは放棄の事実を認めたが、サガスタは何が起こったのか理解できず、ベルリンのスペイン大使の確認を待っている状態であった。シルベラのような政治家は、離反を無視してレオポルドをコルテスで宣言させるよう大臣に進言してい

た。「任命された時に都合が良ければ、また放棄するだろう」とのこと。セラーノはこの熱狂を鎮め、オロサガの主張と辞任の危機を乗り越えて、勝利を収めた。このような事情を知らない我々は、大使の確約を受け、スペイン側でこの問題は解決したと考えた。私が温かくお礼を言ったかどうかは、お察しの通りである。私は、「国王の承認は届いていませんが、私は間違いなく、残りは得られないという立場をとっています。だから、我々は平和を手に入れることができるのである。明日の朝、参議院の前に、この意味での衆参両院への宣言を準備します。私はスペインのこと、あなたのことを話すので、私の言葉に満足してほしい。だから、明日早く会いに来てくれれば、原稿を提出しますよ。彼は来ると約束した。そして、外務省に行き、もしや、エムズからの返事だけが届いていないのではと、探した。グラモンはいなかった。

オロサガの通信とは別に、10時半と11時ごろにベネデッティから3通目と4通目の電報を受け取っていたのだ。3番目（午前3時45分）は、「国王はホーエンツォレルン公からの返事を受け取った：アンソニー公からのもので、彼の息子であるレオポルド公がスペイン王位への立候補を取り下げたことを陛下に告げるものである。国王は私に、この決議を承認する旨を皇帝の政府に伝える権限を与えています。国王は側近の一人にこの通信を私に伝えるよう命じましたので、その条件を正確に再現します。陛下は我々が望む将来への保証について何もおっしゃらないので，私は，今朝陛下に提出した見解を再度提出し，発展させるために，最終

的な謁見を要請したのである。この点に関して、私はいかなる譲歩も得られないと確信する強い理由がある。4番目の電報（エムズ発、夜7時）は、「私の再謁見の要求に対し、国王は、将来に向けて与えるべきと考える保証の議論を私と再び行うことに同意できない、と返答させる」とありました。陛下は、この件に関して、今朝私に説明された考慮事項を参照することを私に宣言させました。国王は、陛下の名において、「王子の撤退を全面的かつ無条件に承認することに同意されました、これ以上はできません」と、再び特使は述べた。エムズを離れる前に、あなたの命令を待つことにします。ドゥ・ビスマルクはここには来ません。大蔵大臣と内務大臣が到着するのを確認しています。グラモンは急いでサン・クルーの皇帝にこの重要な書類を届けに行った。

親愛なる友よ、私はサン＝クルーに行くつもりである。もうひとつ、ニュースを紹介します。彼（国王）はホーエンツォレルンの書簡を伝達し、それを承認した、それは少しだ。先ほどの私の返信にあるこの言葉で、私が慰められないことを想像してみてください。私があなたに危害を加えようとしたと思われるかもしれないと思うと、悲しくなります。私の心や思いとはかけ離れたものである。すべてあなたのものである"私のことを指していると受け取られるような噂について、軽蔑した言葉のことである。このメモには、ベネデッティの電報の本文は添付されていない。私は即座にこう答えた。「親愛なる友よ、あなたの返事の言葉を聞いて、私はあなたの心をもっと理解し、愛す

ることができるようになったので、嬉しく思っています。これ以上、この惨めさを考えないでください。特に、オロサガが送った派遣と比較すると、承認が少なすぎるとは思いません。話し合う前に、自分自身にさえ、コミットしないでください。すべてあなたのものである。

グラモンはサン＝クルーで、食事をしたジェローム・ダヴィッドと対戦した。本当は、委任の説明とお祝いをもらいに来たと言うべきだろう。グラモンは皇帝に、この晩餐会は会議場の数時間後に行われるため、悪い印象を与えるだろうと指摘し、実際、翌日の軍国新聞はこの晩餐会を大々的に報じた。皇帝は、「招待は皇后からで、ジェローム・ダビデを送り出すことはできなかった」と答えた。親愛なる友よ、私は今サン＝クルーから戻ったところである。」。優柔不断なところが素晴らしい。まず戦争。そして、この国王の承認があったからこその疑心暗鬼。スペインの派遣は、おそらく和平に傾くことを可能にするだろう。皇帝陛下より、明日7時に夕食をとり、夕刻に評議会を開くことを同僚全員に知らせるようにとのご指示がありました。すべてあなたのものである。

ここでもグラモンは、責任ある大臣としてではなく、大使として発言したのだ。サン＝クルーの意見が重要であることは間違いないが、私や同僚の意見もそれに劣らず重要であり、あの時間、あの13日の夜、私の心の中に不安はなかった。ベネデッティは放棄を承認したと宣言し、オロサガは全面的な支持を通知してき

た。悪意がない限り、プロイセンとスペインによるこの二重の受け入れは、将来に対する十分すぎる保証を意味していると考えざるを得ない。自分たちで設定した目標を達成したのである。戦争を引き起こす方法はただ一つ、現在我々の意思に従って解決している問題を放置し、プロイセンに対する我々の一般的な不満という争いを起こすことである。私はこれに同意しないことを決意した。

XII

14日の朝、多くの苦悩の末にようやく落ち着いた私は、夕方サン=クルーで閣僚会議に提出する宣言文の作成に取り掛かった。8日前、フランス政府はこのトリビューンに対して、世界の平和を守りたいという気持ちがあるにせよ、外国の王子（6日の我々の言葉を再現すると...）を受け入れるわけにはいかないと宣言したのだ。今日、我々は外国の王子がスペインの王位に就くことはないという確信を持っています。この勝利は、血生臭い犠牲によって準備されたものではなく、理性と正義の力のみによって得られたものであるため、我々にとってより貴重なものである。我々の態度が呼び起こした愛国的な熱気の前では、一つの問題と他の問題を混ぜ合わせて、国を大きな戦争に引き込む口実を作ることは簡単だっただろう。このような行為は、あなた方にも我々にもふさわしくないと思われただろう。ヨーロッパの共感から、そして長い目で見れば、この国の共感から、我々を遠ざけることになる

だろう。目標に向かって行進するとき、我々はそれを隠さず、はっきりと見せます。プロイセンのスペイン王位継承に対抗するため、あなた方の助けを求めているのである。この候補は却下された。あとは平和のための活動を自信を持って再開するだけだ.....」。

私がオロサガとスペインの役割について話をしようとしたとき、ドアが開き、案内係が「外務大臣閣下」と告げたのだ。私が敷居をまたぐと、まだ部屋の真ん中にも達していないうちに、グラモンはこう叫びました。私は立ち上がりました：「私はあなたを理解できません、自分で説明してください!」。そして彼は、私の目の前で永遠に見ることになる、小さな黄色い紙を私に手渡した。13日午前0時過ぎにベルリンから送られてきたレスール電報で、「夜10時に掲載された北ドイツ新聞の補足に次のような概要が書かれている」とある。「フランス大使はエムズで国王陛下に、今後ホーエンツェルン家の立候補に同意しないことをパリに電報で伝える許可を求めましたが、国王は大使の受け取りを拒否し、当直補佐官からこれ以上伝えることはないと言わせました。このニュースは、非公式な新聞に掲載され、街中を大いに沸かせた。

- ベネデッティに注意されなかったのであるか?- 午後、彼が電報で送ってきたのはこうだ。この4通の電報は、夕方になって相次いで届いたが、2通のメモに添付することは急務とは思わなかった。ベネデッティの電報を読んだ後、レソウドの電報を読み返すと、ベネデッティの感嘆詞が理解できるのだ。私は、グラモ

ンの感嘆詞を理解した。港の近くで座礁することはないだった。私はしばらく黙って呆然としていた。もう幻想を抱くことはない」と私は言った。「彼らは我々を戦争に引きずり込もうとしている。我々は、私がすぐに同僚たちを呼び寄せて、この思いがけない打撃を知らせることに同意し、その間に彼はヴェルターが発表された外務省に戻った。すると、先ほどまでと同じように落ち着いた様子でオロサガが現れ、私の「平和宣言」の朗読を聞いた。ベネデッティとレソウドの電報を渡した。彼は、私と同じように狼狽していた。そして、ヴェルターの家に駆けつけ、説明をしてもらうことにした。私はそれを受け入れたが、彼はプロイセン大使に会わなかった。彼らは本会議を夕方まで延期することは不可能だと考え、午後にチュイルリー宮殿に来て会議を主宰するよう、皇帝に電報で要請するよう私に命じた。

12時半、皇帝はチュイルリーに到着し、我々を取り囲んだ。我々と同じように、彼もまた焦りと怒りに満ちた群衆の中を通り過ぎた。群衆からは、騒々しい叫び声、乱れた興奮、外交の遅さに対する抗議が上がっていた。審議は6時間近くに及んだ。今起こったことを考えると、戦争に行く決心がつかないような外務大臣に、その職を続ける資格はないだろう」。丑の刻参りは、プロイセン軍が動員され、我が国の国境を行進していることを伝えてはいない。もしこの動員が命令されていたなら、ベネデッティとストフェルによって知らされたはずである。彼は、自分の秘密の情報によると、武装が始まっていること、ベルギーで馬を買って

いること、警告を受けたくないのなら、一刻の猶予もないことだけを言った。二人の同僚のこの言葉が我々に与えた印象と、その明白な理由にもかかわらず、我々の戸惑いは長く続いた。我々は、最初の衝動にとらわれず、ビスマルクと国王の外交官としての手続きと法律家としての手続きを検討した。まず、北ドイツ新聞に挿入された文書がどのようなものであったかを調べてみた。もし、それが単なる新聞記事であったなら、我々は何の関心も持たなかったであろう。それは、壁や店の窓に貼れる大きな白いポスター（我々の目の前にあった）の形をした特別付録だった。その情報は、新聞記事の形ではなく、公的な法律の文章そのものであり、それを起草した大臣が、それを公にする明確な意図を持って伝えたとしか思えないものであった。そのため、この出版は意図的な侮辱であると考えました。しかし、一旦は納得しても、なかなか決定的な一歩を踏み出すことができない。平和はもう存在しないとわかっていても、我々は平和を希求した。我々は長い間、このように2つの不可能の間でもがき、緩和策を求め、それを拒否し、決定的な当事者の前に退却し、そして不可避的に引き戻されるのである。重責の苦しみを知らない人たちは「ためらい」と言ったが、フレデリックは「いや、あらゆる大事件につきものの不安だ」と答えた。

最終的に、辞任は屈辱的であり、ベルリンで起こったことは宣戦布告に当たること、そして、暴挙の下で頭を下げるか、名誉ある男として頭を上げるかを知るだけの問題であることを、自分自身で認めざるを得なか

ったのである。そして、午前4時に予備役の召集を決定した。元帥はすぐに立ち上がり、我々の命令を実行するために省に向かった。ドアを閉めようとしたとき、彼はある疑念を抱いた。しかし、まだ投票したわけではない。埋蔵金の回収に署名する前に、名指しで投票を要求する。彼は、私から始まって皇帝に至るまで、次々と我々自身に質問した。答えは全員一致だった。さて、「これからどうなるのか、もう興味はない」と元帥は言った。そして、予備役の召集令状を用意させた省に行った（午前4時40分）。

そこで私は、皇帝の平和的な意図を疑われないようにするための最高の手段を提案した。「陛下、立法隊に対して、何はともあれこの事件は終わったことであり、プロイセンの暴露を重要視していないことを主張することをお許しください。大義名分が悪い、信念なくして守る、勝てない、圧倒的な票の下に落ちる、少なくとも陛下を完全に援護したことになる。家の義務として、平和の省を捨て、戦争の省を取ることで、あなたの敵は、あなたが個人的な利益のために戦争を求めたと非難することができないだろう。皇帝は私の提案を好まなかった。「あなたが私にとって最も必要な時に、あなたと別れることはできません。そして、主張しないようにと懇願された。もし、私が皇帝を私の意見に導いていたら、どんなに多くの出来事が違った展開になっていたことだろう。

会議場への宣言文の条件を決め始めた頃、グラモンはベネデッティから数字で派遣が来たことを知らされ

た。審議を中断した。解読された電報は、最後の電報のペリフェーズに過ぎなかった。ただ、国王に貸した言葉は、否定的であることに変わりはなく、堅苦しさはないように思えた。引き返す理由もない。しかし、その決心に怯えるかのように、このかすかな希望にしがみつき、その上で新たな議論を始めた。蛮族が、全世界が震撼するほどの勢いで我々を吹き飛ばし、ドイツ第一国は、王の召集を受ける前から、立ち上がっていた。我々は、この響き渡る一撃を、会議によって頬から拭い去ることができないものかと模索したのだグラモンは、このアイデアを立ち上げた。我々はそれを承認した。私も他の人たちと同様、いや、他の人たち以上に、同僚によれば、私は最も立派な考察に至ったようである。ルーヴェとプリションは、一瞬の隙をついて、皇帝が戦争の危険に王位の堅固さを引き渡さないよう懇願し、我々全員も例外なく、ヨーロッパ会議への訴えを受け入れた。私は、この気絶しそうな勇気を語りながら、赤面しているのである。会議という手段は使い古されたもので、皇帝は困惑するたびにそれを試したが、常に無駄だった。それを形だけ若返らせることで、揶揄されないように見せようとしたのである。いろいろな書き方を試したが、最終的に、話しているうちに、うまくいきそうなコツが見つかりました。「このことを早くキャビネットに書き込んでこい」と皇帝は私の腕を叩いた。そして、同時に2つの涙が頬を伝った。私は自分のプロジェクトを持って戻り、いくつかの変更を加え、採用した。しかし、元老院も立法府も開かれておらず、また、疲れ果てていたため、このような騒ぎに直面することはできなかっ

た。翌日まで通信を延期した。しかし、チュイルリー宮殿を去る前に、皇帝はル・ブーフにメモを書き送った。そのメモには予備役の召集中止の命令は含まれていなかったが、この措置の緊急性については疑問が残るものであった。

XIII

何時間にもわたって議論していた密室から出たとき、私は、人が息苦しい雰囲気から外気に触れたときに感じるような、脳内の幻影が消えて現実を意識するような感覚を味わいました。我々が決めたプロジェクトが、そのまま私の前に姿を現した。世間がどう解釈するかは、すぐに納得した。首相官邸に戻った私は、家族と秘書官を集め、採択された宣言を読み上げた。それまで和平に賛成していた兄たち、妻、フィリス事務総長が、憤然とした表情で叫んだ。それは、驚きと非難のトールだけだった。

ヨーロッパへのアピールは、サンクルーでは首相官邸よりも良い歓迎を受けなかった。皇后は皇帝に「どうやら戦争になったようだね?- いや、それを回避できるかもしれない中間項にたどり着いたのである。- では、なぜ」と皇后はフランス国民を見せながら、「あなたの新聞には宣戦布告がなされたと書いてありますね」と言った。- まず第一に、「あなたの言うように私の新聞ではないし、このニュースとは何の関係もない」と皇帝は答えた。以下は、審議会で書かれた内容

である。そして、宣言文を読むようにと渡した。しかし、「このようなやり方は、国民感情としてどうなのだろうか」とも言っています。ただ、皇帝がグラモンに語ったこの文章から想像されるように、彼女は穏やかにその言葉を口にしたのではなく、その感情を衝動的な形にしたのである。ルブッフは、皇帝のメモにもかかわらず、夜8時40分に動員令を出した。夕食後サン・クルーにやってきて、皇帝に、予備役の召集を撤回するか維持するかを知るために、同日夜に評議会を招集するよう依頼した。皇帝は私に電報で閣僚をサン＝クルーに緊急招集するよう命じました。そして、自分が評議会を去った後に作成した我々の会議計画を元帥に伝えた。「と皇后陛下に尋ねられた。丑松は、戦争があったほうがいいに決まっているが、戦争が放棄された以上、この宣言が最善であると考えたと答えた。- こんな卑怯なやり方が許されるのか?自分の名誉を傷つけたいのなら、皇帝の名誉を傷つけるな。- ああ!」皇帝は言った、「これほど多くの忠誠の証しを与えてくれた人に、どうしてこのような言い方ができるのだろうか?彼女は自分の非を理解し、厳しさと同じくらい後悔の念も温かく、元帥を抱きしめて、快活さを忘れてほしいと懇願した。彼女は何よりも、元帥の頭越しに我々が辿り着いたパーティに手を伸ばしたかったのだ。その点では、彼女の言葉は強すぎなかった。その夜、彼女は正当に感じ、考え、話した。彼女の怒りは正当なものであり、平和を守ることなく、皇帝の信用を永遠に失墜させるような便宜を、自分の地位を利用して破棄したのは正しいことであった。

私がサン＝クルーに行ったのは、パリでよく見られるような、8月がまだ葉を枯らす前の楽しい夕方のことだった。空気は重くなく暖かく、星の瞬きはミディほど鮮やかではなく、柔らかで、セーヌ川はゆったりと流れ、岸壁沿いやブローニュの森の路地では、街の激しい動揺を感じさせず、伝染性の静寂が支配している。喜びと生命の源である平和、ミューズとグレイセスの姉妹である平和、愛すべき豊穣な平和であり、恐ろしい死神である戦争ではないのだ。という自然からのアドバイス。彼女の声を聞いて、私は驚きました。このまま権力から逃れて、あの無頓着な群衆の中に身を置いていたいと、どんなに思ったことだろう。そして、その感情のままに、私は再びこの問題を取り上げ、一つ一つの議論を並べ立て、何よりも平和的な議論を主張した。私の額には、内なる苦悩から滴る汗が浮かんでいました。Et in agonia ego.しかし、私がどんなに洗練され、主張し、明白なことと闘っても、それは私を抱きしめ、壊し、服従させ、私はいつも同じ結論に戻るのである：フランスは自発的に、無礼にも侮辱されただけで、それに耐えれば、彼女の名誉の不実な守護者となるのである。聖人は吹き飛ばされると、ひざまずいてもう一方の頬を差し出します。その高みを目指して、国民に提案できないだろうか。侮辱にたいする勇気ある鈍感さは、「侮辱を与えた者に返ってくるものであり、その結果、侮辱を与えた者に完全に噴出するものである。」と、私は知っていたのだ。しかし、これらの蔑視は、個人の美徳を民族の蔑視にするものではないだろうか。

ついに私の馬車はサン・クルー城の階段で止まった。私が一番乗りだった。皇帝が一人でいるのを見つけた。彼は、この予期せぬ招集の理由を一言で説明し、「反省しているが、先に採択した宣言はあまり納得がいかない。- 私も同じ考えである。下院に持ち込めば、車に泥を塗られ、ブーイングを受けるだろう。しばらくの沈黙の後、皇帝はこう続けた。「政府が時にどのような状況に陥るかを見てください。セグリ、ルーヴェ、プリション以外の仲間は次々と到着したが、召喚状が届いていなかった。皇后は、初めて評議会に出席した。丑松は会議の目的を説明した： 皇帝の書簡が彼を心配させ、その後、評議会が停止した新党のことを知った： この新しい政策と予備役の召還が両立するかどうかを評議会で決定してほしい： 彼は我々の最初の決議に従って命令を送ったが、それは我々の審議に重きを置くものではない： もし取り消しが必要と思われたら、彼だけが国の前で責任を取り、彼は辞職を表明することになるだろう。グラモンは、その可能性を議論する時間を与えてはくれなかった。彼は、我々がチュイルリーを発ってから到着した派遣状や電報、13日の日中のベルリンでのビスマルクの態度に関するレスールの報告、エムスからの最新の電報、ベルンとミュンヘンからの電報を我々の目の前に置いてくれたのである。レスードは、放棄の知らせ以来、ベルリンでは1週間にわたって見られた平穏が失われ、苛立ちが突然平静を取り戻したと説明し、ロフタスがビスマルクとの会談から持ち帰った悲観的な印象を語ってくれた。ベネデッティは照れくさそうに、エムズでの最後の日について知っている事実を教

えてくれた。しかし、それよりももっと深刻で重要なのは、ベルンからの電報であった。ドゥ・ローダー将軍は今朝、ビスマルク伯爵からの電報で、ウィリアム王がプロイセン王としてホーエンツォレルン公の立候補に再び同意することを拒否し、王もこの要請を受けて我が国の大使を受け取ることを拒否したことを大統領に伝えました」。ミュンヘン公使のカドレは、「ミュンヘン公使が電報で送った派遣状を、多少なりともそのままお伝えしなければならないと思います」と述べた。ホーエンツォレルン公の離脱がスペイン政府からフランス政府に公式に伝えられた後、フランス大使はエムスの国王陛下に、ホーエンツォレルン公が決定を覆した場合には、陛下は永久に同意を拒否することを約束する旨をパリに電報で伝える権限を与えるよう要請した。陛下は大使の再来訪を拒み、側近に「もう連絡することはない」と告げさせた。この2通の電報が公式なものであることは明らかだった。コミング＝ギトーとカドールは、同僚の秘密からではなく、プロイセン閣僚が公式の場で伝えた盟約者団の議長やバイエルン閣僚会議の記録からそれを知ったのだ。しかし、中立国であるベルンへの通信は、北ドイツ政府のすべての公使館に送られた一般的な指示によってのみ説明することができます。もはや、無駄で危険な感傷に浸ることは許されず、強制された出会いを受け入れるしかないのだ。

午前8時40分からすでに実行されていた予備役の召集を維持し、グラモンと私が宣言文の草案を作成し、翌日、同僚が一人も欠席しない理事会で検討することで

合意した。このサン・クルーの会議では、審議というより、みんなが同じような考えを口にする会話に終始していた。皇后陛下だけは、一言も発せずに聞いておられました。我々は、重大な事件に際しての習慣である、名前と声による投票を行わなかったのである。実際、我々全員がその意見に大きな敬意を抱いていた3人の同僚が不在のまま、決定的な党を採択することはできなかったのである。Plichonはセッションの最後に到着した。我々は、今、我々の間に起こったことを彼に伝えました。

11時半にパリに戻った。このようにして、フランスと王朝の運命が決定され、30分ほど勝利した平和が、何の呪文かわからないが、その呪文の力によって押し戻されたであろう、運命の夜と化したこの夜が終わったのだった。戦争は避けられないという意見交換が行われたが、何も決まらなかった。明確な決着がついたわけでもなく、取り返しのつかない事実が達成されたわけでもない。予備役の要請は維持されたが、それは午後にチュイルリー公会議で決定された。新たな宣言が必要と判断されたが、その起草は翌日に延期された。

甘い希望で始まり、悲劇的な予感で終わったその日の終わりに、私はミッチェルを自宅で発見した。私は彼に、我々が行った決議と、宣戦布告を余儀なくされたことへの深い悲しみを告げた。私は戦争、特にドイツとの戦争を防ぐために生涯をかけて戦ってきたのだ
彼は私の苦悩に共感し、「では、辞表を出しなさい」と言った。- できません。国は私を信頼しています

し、私は帝国とフランスを結ぶ盟約の保証人なのである。私が手を引けば、ルーア省の出現は議会改革に対するクーデターとみなされ、ただでさえ深刻な事態が、さらに内部の困難によって複雑化することになる。そして、戦争は決定され、正当であり、不可避であり、今日いかなる人間の力もそれを追い払うことはできない、と付け加えた。それを防ぐことはできないので、普及させることが我々の務めである。撤退すれば、国を落胆させ、軍の士気を低下させ、フランスの権利とその大義の正当性に挑戦することになる。- では、どのような希望をお持ちなのだろうか。- 私にとっては何もない。勝利の後（皆と同じように私も確信していた）、軍国主義は自由を隠そうとするだろうし、私の仕事は脅かされるだろう、しかし私は何ができるだろうか?職務上の命令で、私はここに留まることにした。

エミール・オリヴィエ

脚注

1. ↑Falsification, Dictionnaire de l'Académie: 騙すつもりで改変すること：「ある文章の意味を偽らないように気をつけた。(パスカル.プロヴィナンス.)

この項目は、**書きかけの項目**です。この項目に加筆する場合は、ヘルプ、スタイルガイドを参照するか、または項目の議論ページにコメントを残してください。

この作品は1929年1月1日より前に発行され、かつ著作者の没後（団体著作物にあっては公表後又は創作後）100年以上経過しているため、全ての国や地域でパブリックドメインの状態にあります。

原文の著作権・ライセンスは別添タグの通りですが、訳文はクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスのもとで利用できます。追加の条件が適用される場合があります。詳細については利用規約を参照してください。

About this digital edition

This e-book comes from the online library Wikisource[1]. This multilingual digital library, built by volunteers, is committed to developing a free accessible collection of publications of every kind: novels, poems, magazines, letters...

We distribute our books for free, starting from works not copyrighted or published under a free license. You are free to use our e-books for any purpose (including commercial exploitation), under the terms of the Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 Unported[2] license or, at your choice, those of the GNU FDL[3].

Wikisource is constantly looking for new members. During the realization of this book, it's possible that we made some errors. You can report them at this page[4].

The following users contributed to this book:

- 小椋素
- Kwj2772
- Rocket000
- TKsdik8900
- Jdx

- Santoposmoderno
- Boris23
- KABALINI
- Bromskloss
- Tene~commonswiki
- AzaToth
- Bender235
- PatríciaR
- Hakatanoshio117117
- Miki59697270
- Palosirkka
- Dbenbenn

---

1. ↑ https://wikisource.org
2. ↑ https://www.creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0
3. ↑ https://www.gnu.org/copyleft/fdl.html
4. ↑ https://wikisource.org/wiki/Wikisource:Scriptorium